９月総評　西躰かずよし

口語で書くということは、話しことばに近接しようとする点において、自身の声そのものを届けようとするような、そうした願いを内包させうる可能性を持っている。けれども、その声がそのまま作品になることは無い。その声と、作品を書くという営みのあいだには、どうしようもない断絶があるが、今月の作品のなかにはそうした断絶の意味を考えさせられるものがあった。

ビーカーに星の明りをためておく　　細村　星一郎

ビーカーに明りというシチュエーションに惹かれる。「星の明り」とは、ある種手垢の付いた言葉であるが、衒いなくそう詠んだことで、作品は若々しくロマンチックなものとなっている。

青い静寂が
咥えタバコで
哲学していた　　山口　航平

藤富保男の詩を思わせるようなシュールな作風。こうした書き方はともすれば作為的になりがちで、ある種の困難を伴うだろうとも感じられるのだが、この作家にはこの方向で突き詰めていって欲しい。

セリフめく母の告白　　遠雷　　長谷川柊香

セリフめくというフレーズで母の告白はとたんに不穏なものとなる。遠雷とその不穏さが響き合う。

人間に好かれる動物と
そうでない動物がいて
なんだか申し訳なく思う　　長野小夢

人間に好かれる動物とそうでない動物がいるのはあたりまえのことだけれども、そのあたりまえのことに申し訳なさを感じてしまう感性は詩人のそれかもしれない。暮尾淳の「おれはといえば/権力者からならかまわないが/たぶんそうではない/誰かの幸せを掠めながら/生きているような思いがしてきて/心苦しくもなるのだが」という詩（※「夏シャンツェ」）

に通じる。

朝起きて
冷蔵庫の檸檬の黄色で目を覚ます　　春町　美月

朝起きたとしても目覚めを可能とするのは檸檬の黄色でしかないのかもしれない。
そこには目を覚ますという行為の新たな側面が映し出されているかのようである。

自らの首に縄をかけるとき
やっとあの人の気持ちがわかる　　ベロニカ

あの人の気持ちを理解するための「自らの首に縄をかける」という極端な行為、その生々しい書き方には賛否が分かれるだろう。だが、そこにひとつでも共感が生まれるならばそれは無意味なことでは無いだろう。

この世界のどこかに昇る朝日で
わたしは覚悟の檸檬を搾る　　宇井 麻千

この作品に漂うさびしげな印象は「世界のどこかに昇る朝日」と「覚悟の檸檬」というフレーズの不均衡さから来ているように思う。「覚悟の檸檬」という重い言葉とうらはらに、それを搾るのは「世界のどこかに昇る朝日」でしかない。どこかに昇る朝日は、いつ、どこで昇るのか、不確定なまま読者に投げ出されている。